

石文化とデザイン

— 金沢 — 2

小松 暁 一

信仰と生活に生きる石

山野の細道、街道や村はずれの小道の思わぬ処に「しるべ石」を見つけ出したり、しめ飾りや赤い布を巻きつけた自然石や、また小石をかさね「石塔」になぞえた石の姿を見かけることがあるが、そこには人間のいとなみと信仰に対する問いかけが印象づけられるとともに石と創造の心を意識することができる。

石への信仰は日本人の信仰の原形とも云われているが、石神研究には神体石として盤座、石座、玉石、鎮め石など、その神石の根元や奥深い信仰と人間の心理を結びつけることは甚だ興味深いものがある。

日本人の石信仰について折口信夫氏は、道祖神の問題をあげ、道祖神は地方によって「塞の神」とも呼ばれ、また「道陸神」とも称されていると云っていられる。しかし神の形態や神の祭られる場所、神の発生と信仰の歴史、伝播等の問題は、今日なお未解決な問題を多く残しているが、古代人の石や岩に対する絶対的な信頼感が各地に伝わる石信仰の伝説によって強く指摘されると述べられている。

石が海岸から漂着すると云う信仰は古くからあり、神が海より依り着くとして「寄り石」の信仰と呼び、海中の石が漁師の網によってかかったものを神体として祀る例は知られているが、一方海岸の岩窟の石にも岩に神が海の彼方から来るといふ処より「寄り石型信仰」が形成された例も多い。海や川の石拾いの習俗は、石は水に漬かることによって一層美しくなり霊力を増すとして、石拾いは心清らかな感を抱くものとされている。

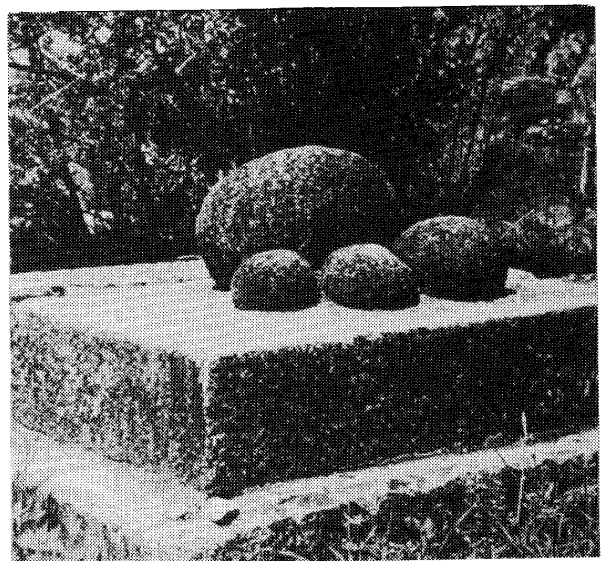
伊豆半島の西北端、大瀬崎では毎年石俵の奉納の4月4日には氏子のなかの漁業者を中心に俵に小石を詰めたものを一度海水に沈め、さら

にそれを担ぎ社前に奉納する行事は今も知られている。

柳田国男氏も「石の中にさらに小石を含んだ石があり、子供に恵まれない女性がこの小石を持ち帰ると懐妊する」と伝えられていると話し、石信仰に結びつけ、石が子を産むといった「はらみ石」、「子抱石」を指摘している。

石の軽重で人を占う風習も古くからあり、「日本書紀」景行紀には、石を蹴ると石が柏葉のごとくにあがったと云う記述があり、石占いの精神は石のなかに魂が宿っている信仰に基づくもので、石を投げて距離を計る占いもあると聞いている。金沢にも「石うらない」からその名称が生じたと伝えられている石浦神社が古い歴史を持っている。

甲州路に多く見られる自然石の丸石や石棒も古くから石神として祀られており、丸神道祖神、屋敷神として丸石のもつ石の美しさや魅力を信仰の対称として、より意識の高揚に役立つものとしており、丸石神は深い謎を秘めた素朴で神秘に富む信仰の対石として、今も見る人々に感動を強く与えている。



日本人と西洋人では、石への対応のあり方が異なるのは歴史のなかで知られるごとく当然であるが、それは単に歴史的に住空間における石材利用が日本建築で少なかったと云うだけでなく石の対応には日本人にとって風土や精神性、歴史に基づく自然感や存在感の伝習要素に不可分であったことが指摘されるものと思う。

日本でも鎌倉時代に入ると、仏教はより大衆化へと進み、社寺には石を素材とする石塔、灯籠、狛犬、玉垣、鳥居、石標などの石造物が目につくようになってくる。とくに山上にある社寺への参道には、その行程を示す「町石」が古くから存在している。

高野山に残る町石は単に距離を示すだけでなく山に登るごとに聖地、靈界に近づく信仰心に基づくもので、当時は町石ごとに読経をしたり手向けをすることが必要とされていた。町石として最も古いものは、近年発見された大阪府箕面市勝尾寺に保存されていた五輪率都婆で、宝治元年（1247）のものと思われる。

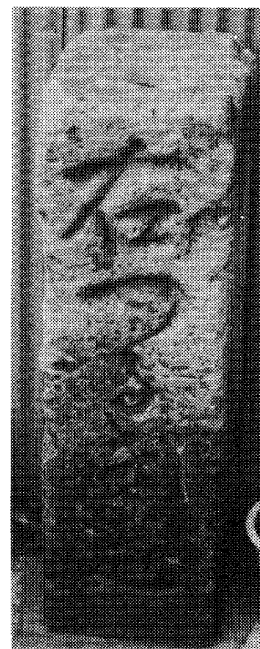
道端の思わぬ処で古い「しるべ石」を見つけ出し、しみじみすることがあるが、近年は交通事情による道路改造によってその歴史的遺産は少なくなってしまった。

「しるべ石」と云っても町石を含め街道しるべ石、領地標示石、社寺参道しるべ石、道しるべ石、教導石、下乗石と多様である。「道しるべ石」についても古くは自然石、板碑、角塔婆、笠塔婆などの形体をもっていたが、江戸時代に入り、方柱形のしるべ石が主に使われるようになる。当時は世情や生活も段々安定してきており、旅をする人々が多くなるにつけ、しるべ石は庶民の生活に強く結びつきその役割は大きかった。当然社寺の参道しるべ石は単に場所や道を教えるだけでなく、より強い信仰心の現れと見るべきであろう。下乗石は、馬や乗り物から下りることを示す標石であった。

金沢にも幾つかの「しるべ石」は残っている。泉が丘高校向い平沢内科医院横の畠に位置する「参道大乘寺」の参道しるべ石があり、標石は青戸室石で側面に「元禄14年10月」と刻り込まれている。しかしその位置が正確な参道であったかは定かではない。



金沢市泉ヶ丘
参道大乘寺



右 つるぎ道



左 のだ山



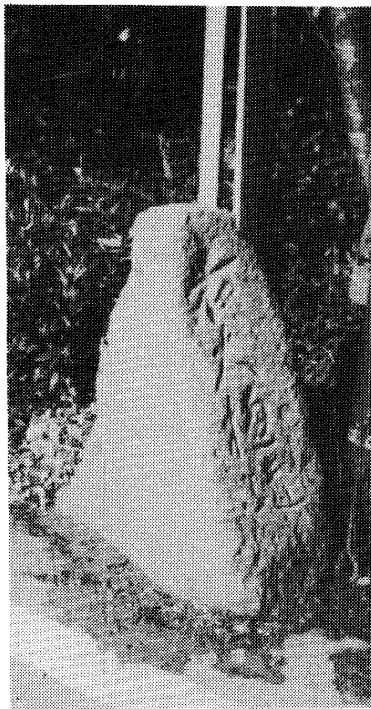
金沢市橋場町
藩政期の金沢の道標の起点

同じく長坂町野田墓地入口近くにも「役是南大乘寺道」の標石があり、台座が赤戸室石で石柱は越前石であった。横には小さな標石で「のだやま」のしるべ石を見つけたが、すでに古く破損していた。

金沢市橋場町に現存している石造りの「枯木橋」は、藩政期の金沢からの道標の起点となる重要な石橋であったが、一部明治期に改修している。しかし、今後の保存には充分と配慮が望まれる。

古い道しるべ石としては、金沢市田の島（現田島町）にある「左ふたまた道、右たのしま村」。金沢市二俣町には「左福光道、右やまみち」。金沢市田上町には「左とむろ、右ゆわくへ」。金沢市寺町5丁目の私有地には「左のだ山、右つるぎ道」などの「道しるべ石」が残っている。

ていたと云われる道標が保存されている。建立は寛政12年頃（約1800）に造られたもので、石質は青戸室石で高さ1.4メートルの角柱で「左京都道、右金沢道」とあり、側面に千代尼の句詩として「道もそのみちにかなふて物すゞし」と石堀りしてあるが、上部が少し破損しているが、しっかりした道しるべ石である。



金沢市二俣町
右 山みち
左 福光道



金沢市二俣町
右 大樋道
左 天神町道



右 京都道



左 金沢道

金沢を離れて見ると、旧鶴来街道はずれの地藏堂の横に保存してあったが、「左白山御宮」のしるべ石を見つけ出した時は思わず心温まる思いであった。

松任市は若宮八幡宮の境内には、旧北陸道の松任には東町と大町との角に大正時代まで残っ

能登路には、昔から道標が多く残っていると伝えられていたが、近年は急速な道路改善工事のために少なくなってしまう。能登のしるべ石は、信仰との連がり特に強く庶民と信仰と生活の結びつきを窺うことができる。

門前町元市には「左わじま、右あな水」とあり、その中央に「馬頭観世音」と刻み込まれている。安政7年（1860）建立したものである。同じ門前町谷口には、土地の人々が馬頭様と呼ぶ「南無阿弥陀仏」を中央に「石あなみず、左としかね」の石標があり、門前町別所の穴水街道沿に総持寺への距離をしるした石標、門前町、総持寺前の「大本山里程標石」、鹿島町二宮の「石動山本社迄従是五十八町」の標石などが目につくが、今後の調査による発見が望まれる。

加賀市大聖寺、山中街道入口には、「山中温泉道」とあり、その横に「山中や菊は手折らじ湯のにはい」と句が刻み込まれてある。いかにも情緒的表現であり、石標下部には「是ヨリ二リ」と標されている。最近金沢市の企画によって、坂道や歴史的辻道に石標が造られているが、金沢の歴史や地形的環境を知る上で旅人に良い印象を与えている。祈願対称の石として「病の石」が多いが、疣に悩む者のために各地の路傍に「疣石」と呼ぶ石がよくある。また「咳取石」、「夜泣石」などもあるが、兼六園、金城池の横に横幅50センチ、高さ約24センチのすべすべした石があり、この石を俗に「いぼ取り石」と呼んでいる。「金城勝覧誌」には、「放生池の側に奇石あり、疣石と称ふ、之を摩して疣を撫れば能く愈ゆといふ。亦夫人（真龍夫人）の能州鹿島郡町屋村にありしを移されたものなり」と記してある。この石は12代藩主齊広の夫人が能登鹿島郡町屋村から移したもので、もと馬見所（現在の梅林附近）にあったものである。町屋村とは現在の七尾市町屋町である。

このように、昔からの人のいとなみや信仰に伝えのある石を探し出すことは興味あることであるが、人間が石を道具として利用した歴史は古く今も続いていることに今更ながら驚くことが多い。俵編みと石、藁叩き石、船つき石、漬け物石、石臼などと例をあげればきりがなく、日本人の生活や習慣に親しく根強く続いてきて

いるのである。

信仰と石と云うことになれば、石段もこの仲間に入る。地中海沿岸を含めヨーロッパに於ける石段の歴史は文献や絵図に描き出され、都市形成に大きな要素にもなっているが、その発展の素地は地形や風土に適応する機能ばかりでなく、段上における建物に対する敬意の現れや権力の具体化された道であり、空間演出とも云われている。

日本の場合も地形に対する適応機能には変りがないが、特に社寺等における精神性と感情を背景とし、斜面景観の石垣や石段を含め道具的設備意識の方が強く感じられる。

その例として、石積み護岸や用水におけるかわどの布設、また護岸のファニチュア設置など歴史的遺産としても優れたものが多い。琵琶湖は竹生島の崖地型水際のデザインを見るとき、石段、鳥居、また石段、観音堂と樹木の寄生に企画構成が見られる。また同じ琵琶湖、堅田の石堤と石段は、水に関する石段の空間計画要素が石積み技術とともに強く現れていることで知ることができる。

寛永12年（1635）、金沢は大火に見舞われているが、この機会をとらえ加賀藩は家臣団の配置、町並機能を企画化し本格的な城下町を造り始める。

この計画のなかに、注目されるものの一つに寺院の分散と集中があった。そのとき区分されたのが、現在の寺町、小立野、卯辰山麓の寺院群の配置であった。いずれも変化ある地形に位置し、防備上の問題だけでなく、まさに山際における修景空間演出のデザインと見ることも出来るかも知れない。

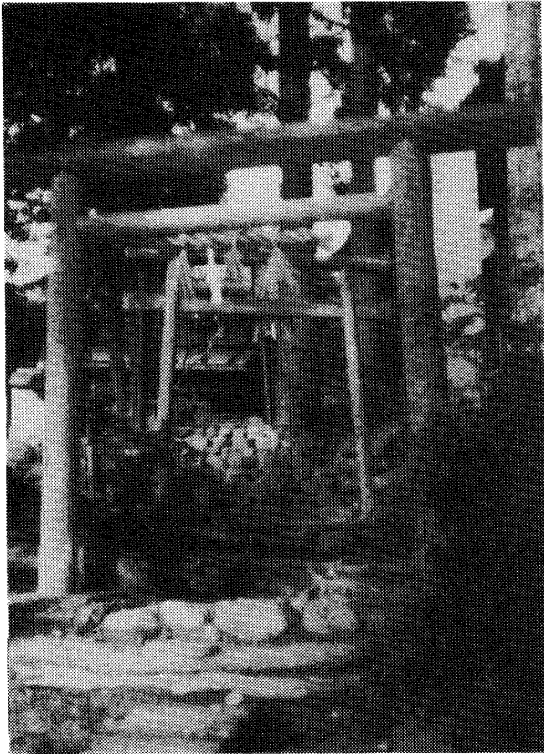
特に卯辰山麓の寺院群は、山あいの斜面に位置する寺が多く、そこには、坂とともに道路より、山門、境内に至る石段の効果的設備がなされている、直線的な構図や曲線的な要素と屈曲的道路とが不思議な空間の魅力を印象づけている。

竜国寺の石段は30段の参道であり、最勝寺は山門まで10余段、附近には西養寺、本光寺、真成寺等多くの石段を持つ寺院が多くあり、個性ある雰囲気を持っている。山の上町の小坂神社

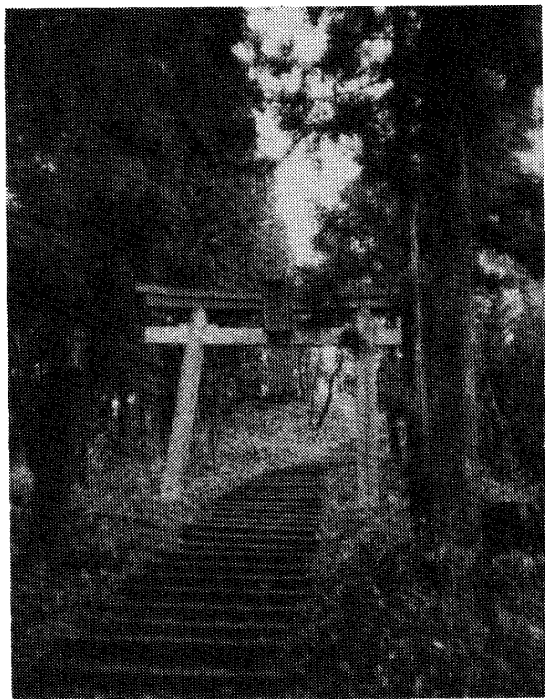
は、104段の石段を数えることができる。

珍しい信仰の石段としては、明治初期に三小牛、九万坊大権現の石段は、伏見川の川石を割って積みあげていった急勾配の石段を構成している。

寺町台地、桜坂中腹にある犀川河畔に下る細い急な石段には途中小さな地藏堂があり、これも信仰の石段と見てもよい。



金沢市三小牛 九万坊大権現石段



金沢市平栗町 坪野神社

明治9年(1876)に造築された尾山神社楼門への石段は、赤戸室石によって構築された、登長17.36メートル、幅12.79メートル、勾配16°で25段の広くゆったりと登ることのできる石段である。異色のデザインである楼門と一体となり、美しい構成を見せている。

東兼六町にある鶴林寺は、江戸末期(文政2年)の古い寺院であるが、山門から本堂への敷石や低い勾配のモダンな石段は赤戸室石によって造られている。赤戸室石は青戸室石に較べ軟いためか、その摩りぐあいに趣きが感じられる(一部保修に青戸室石が入っている)。

信仰と直接関係がないが、室生犀星と縁が深い野町1丁目雨宝院境内に、「まよい子ここへもってきべし、ここへたずねべし」と刻み込まれた石柱がある。この石柱は、道で迷い子を見つけたら当院にもってきなさいと云った意味で、昔大火や田舎から金沢へ来て迷い子になった子供達のための大変珍しい「しるべ石」である。石柱には文政10年(1827)の年号が見られる。

祖先の霊を祀るものとして各種の墓石があるが、墳墓、つまり古墳時代、支配階層によって造られた墳墓や御陵は日本の偉大な遺産ともいえよう。

江戸初期の頃まで「墓石制限令」によって、支配者達によってその存在は縛られ続けており、今日で云う墓石といったイメージとは一般庶民の墓はおよそ縁の遠い形であった。ある者は水葬で海や河川に投げられ、ある者は山辺や川辺に埋葬されるも石ころで死者の上を敷詰め、その上に土盛りをし自然石や木柱、石仏を建ててあるぐらいであった。

庶民が墓を持つようになるのは、室町時代の末頃と云われ、この時代も庶民と云っても経済力のある者達にかぎられ、多大のお布施を僧侶に贈って院号や居士号をもらい墓を造ることになるが、天保2年(1831)、幕府は寺社奉行に命じ、百姓町人の院号、居士号を禁止し、墓石の大きさも制限している。台石ともに4尺、即ち1.9メートル四方である。

一般庶民が墓碑を建立できるようになったのは江戸時代に入ってからであるが、制限のなかに墓の形も権力層と異り、古来より襲用してい

た石造りの詞形仏像，即ち阿弥陀如来，観音さま，地蔵さまに名を刻み込んだもので，率塔婆形，屋形石塔，ごく普通の自然石や切石などであった。明治以後には，この差もなくなっていく。

一方，歴史的に見ると神道においては，貴族や武家の死者に対する祭祀は，古墳から石碑の墓に変わってくるが，奈良時代に施行された法令「^{ソツソツレ}喪葬令」には「凡墓皆立碑，記具官姓名之墓」と規定され，墓には碑を建て官位姓名を明らかに記すことが必要とされるようになる。

藩主前田家累代の墓は，金沢の野田山山腹に広く点在している。墓の形は神道式で御陵のようであり，前面に石鳥居がある。初代利家の墓は当然ながら一番大きく（高さ9メートル，周囲8.6メートル）土盛りの墓の前には石標が建てられている。

代々の藩主の墓も大きさには大小あるが，同じ様式で建てられている。利家の墓地までには百数段のゆるやかな坂石段があり，幽玄な環境に百万石藩主らしい拡大なスペースと落ち着きもっている。

穴生衆と金沢

文禄1年（1592），朝鮮の役にあって肥前の名護屋にいた前田利家が，嫡子利長に金沢城修築を命ずる。

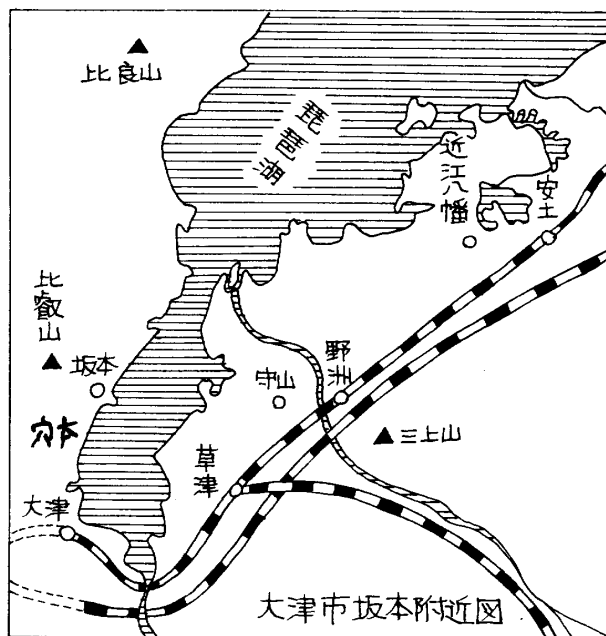
当時の金沢城は土塁を築き木の柵を設けただけの貧弱な城堡であったので，地形の利用，防備の重要性を充分と考慮し，まず百間堀を開き水濠とし堅固な高層石垣を造り，二の丸，三の丸の周囲にも濠をうがち石垣を築いていく。

城の外濠が完成し城郭の骨格が出きあがったのは，慶長15年（1610）三代藩主利常のときとされている。この長期にわたっての修築の石垣工事を中心に活躍するのが，近江穴太より穴太衆と云われる熟達した石垣師達であり数多く金沢に招かれている。

近世において，石工が最も多く輩出しているのは，瀬戸内の島々やその沿岸地域であると伝えられているが，城普請に従事した石工は主に穴太，馬淵の石工達であった。

穴太は「あなふ」とかき「あのう」，「あの」と発音し，一般には「穴生」と書いている。穴生は，比叡山の琵琶湖側，壺笠山の東麓附近，延暦寺の門前町坂本の近くにあり，ここに大友氏を中心に穴太氏，錦織氏，戸波氏と云った大陸から渡来した帰化系の人達が住みついた処である。当然，穴生衆も帰化系の子孫である。

この穴生一族（穴太を意味する）が，大陸から伝えられた石加工技術を広めたため，当地では早くから墓石や五輪塔を巧みに造る石工が多く，石塔師と呼ばれていた。石垣についても延暦寺の鎮守社の日吉大社周辺には里坊が多くあり，この里坊の周囲に築かれている石垣は「穴生積み」と称され見事な石垣の美を構成している。また近くの山々から多くの御影石が産出していたことも幸いし，彼等は技術を最大に利用し利益をもたらしていた。



築城に初めて石垣が利用されたのは天智3年（664）筑前笠郡に，また翌年には長門，築紫の大野にも築かれた歴史があるが，これ等は韓様の石壁の日本での始まりと云われており，外冠に備えるものであった。

石垣は，中世の山城において地形防護を生かすため要いられていたが，この山城の場合は，あくまで土塁の保護のためで本格的な城石垣ではない。石垣が大規模な土木工事によって人工の防衛地形を造ったのは，何と云っても近世に

おける平山城や平城においてである。

永禄12年（1569）、織田信長が將軍足利義昭のため、二条城に館を造営するが、この塁を全部石垣とする。これが本格的城郭の石垣造りの最初であった。

天正4年（1576）に安土城が信長によって着工され、3年間をかけ見事に完成するが、当然穴生衆が動員され活躍することになる。特に巨石の運搬技術、石積み技術にその知識と力を発揮する。以後穴生の石工達は石垣師として各地の城郭の石垣築造に従事することになり、穴生衆と云えば石垣師の別名と称されるまでになっていった。

江戸時代に入ると、諸大名によって穴生衆は召し抱えられる者も多くなり、また穴生衆のなかには終生その地に居着する者もあり、現在でも各地に穴太、穴生、穴納、穴濃、穴能、阿野、阿武などの苗字や地名が残っているのは、おそらく彼等の筋を引くものと考えられる。

こうして穴生衆達が築城石垣造りに参加した城は多く、各地の資料を見ると二条城や安土城に始まり、伏見、大阪、熊本、高知、姫路、名古屋、駿府、岡山、広島、伊賀上野、江戸、金沢、高岡、小松、竹田、高田、会津等の諸城や日光東照宮などをあげることができる。

各城石垣造りには、風土、地形、石質、機能についてもそれぞれの個性が配慮されていることは穴生衆の技術的幅の広さ、また技術の適応に対する城主との信頼度の中に、石垣造りに徹する工人の意識を見出すことができる。

穴生衆の組織についても江戸時代に入り、穴生頭は世襲制を原則として穴生衆を統率し、次男、三男などに対しても各大名家の作事奉行、石奉行の支配下に入って活躍していった。

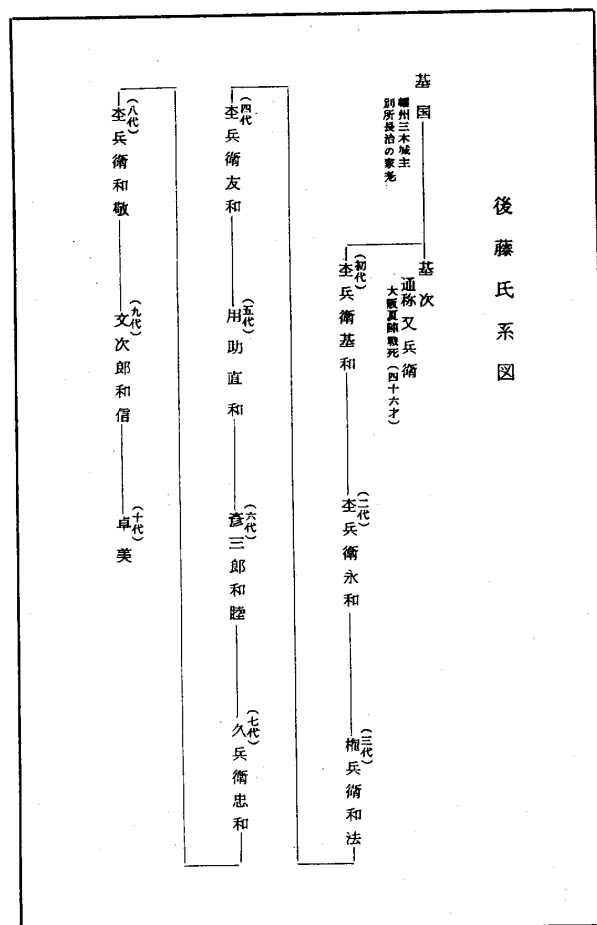
穴生に対して、馬淵は国鉄近江八幡の近く瓶割山麓に存在し、昔から石の供給地としてまた石臼づくりで知られていた。穴生衆と同じく各地の築城工事に参加することになるが、馬淵の石工達は穴生衆のように石垣師としてでなく、石材を切り出すことが主な仕事で穴生衆のように華かさはなかった。

城造りに携る者として「くろくわ」、「くまそき」などの名称を聞くことがあるが、この人

々は城造りの基礎となる土塁や宅地の土台、田畠の畦道などをつくる役目が主であった。後に「黒鋤者」と呼ばれ、江戸時代では普請奉行の下に属し、土木工事、荷かつぎ、防水、警備の任にあたっていた者達である。

金沢でも、明治4年（1871）まで穴町と称する町が存在しており穴生衆が定着し住んでいた町と思われるが、後に谷町となり現在の長土堀2丁目附近にあった。

歴代穴生方として加賀藩に仕えた後藤家は金沢城修築の頃は石屋小路（現武蔵町）に屋敷があったと「石屋小路史」は語っているが、初代後藤壱兵衛基和は彦八と称し築城技術に優れていた篠原出羽守の家臣であったが、前田家に懇れ直属の家臣となっている。また注目されることは、後藤家は穴太生まれでなく、幡州の出身で武将で有名な後藤又兵衛基次と腹異いの弟であるといった系譜をもっている。天和8年（1622）三代藩主前田利常の命によって篠原出羽守から召し返され知行取となり穴生役を勤めることになった。



「金城深秘録」によると、前田家府中時代（現武生）より穴生方として仕えていた者に穴太源太左衛門、穴太源介らの名があり、また慶長10年（1605）二代藩主前田利長が富山に移るときに連れていった穴生方に穴太又助の名を見ることができる。



金沢城石垣

同じく「金城深秘録」によると、加賀藩初期の穴生方には戸波清兵衛、杉野久左衛門、杉野清右衛門、穴太源介、藤田三右衛門、後藤奎兵衛などの穴生頭領達の名があり、寛永年間以後召し抱えた穴生方としては杉野茂兵衛、小川長右衛門、穴太又助、矢倉彦兵衛、杉野右衛門、後藤勘左衛門、柿木左衛門等多くの穴生衆の存在が記録され、また知ることができる。

「金城深秘録」や喜内敏氏監修の「金沢城郭史料」には、加賀藩主に代々仕えていた穴生方の由緒書、秘伝書ならびに金沢城の石垣造りに関しての記録など貴重な資料について説明があり、また当時の文献、絵図類が「後藤文庫」として金沢市立図書館に収蔵され公開されている。

加賀藩の穴生衆は、金沢城の築造や小松城、

高岡城などの石垣造りにも活躍するが、藩命により遠く江戸、会津、大阪城の築城工事にも参加しており、又加賀、越中の河川護岸石垣、橋の架台工事などにもその技術を発揮した記録は多く残っている。

明治維新を迎え、いわゆる藩籍奉還によって最後の藩主となった前田慶寧は、領地、家臣、領民を朝廷に返還し、明治5年（1872）には、武士の家禄の消却を計画実行していったが当然穴生衆の身分もくずれ分解を余儀なくされていく。

明治元年（1868）の北越戦争には穴生衆も多く参加しているが、帰国後穴生衆は、土木工事を本業として生計をたてていく者、墓石工人として石屋を開業する者、後には鉄道土木工業者となっていった者もいた。穴生衆頭領の後藤家9代文次郎和信氏は警察官となり、後に金沢市書記を歴任している。穴生家（3代目で奥家を名のるが、9代目で旧姓にもどる）の後齊友三郎氏は現在も金沢に在住されていると聞いているが、その他加賀藩に仕えた穴生衆の多くの存在は、不詳な面が多い。

藩政末期から明治にかけて、穴生衆とは別に金沢土着の石工群もあり、その中でも八野、小間井、釣川、村井、小野、由野家は石工6人衆と云われており、いずれも扶持の身分であった。現在石工人として残っているのは八野、村井、由野家の人々である。

明治3年3月、八野甚吉郎記す処の由緒書によると、八野家の先祖は石川郡八幡村の出身で後に金沢市南石坂町にあって八幡の屋号を持つ石屋となる。

慶応2年（1866）、「御宛行式人持、銀二百目給る」とあり、同3年には「御普講会所御指止に付、町御奉行御支配に被仰渡、同年割場附新足軽並被召抱、御切米右之通被下之、苗字八野と相名乗申候」とあり、御切米は拾五俵とある。

後に北越戦争に参加していることが記されているが、当然八野家以外の由野家、村井家等においても同様の由緒書があるものと思われる。

金沢に藩政後、石材の組合的組織ができたのが明治30年頃と伝えられているが、現在は、金

沢石材工業協同組合の名称のもと38名の会員があり、石川県石材組合連合会は169名の会員で組織化されている。現在の会長は橋爪豊康氏である。

また数少ない石積み工人として、現在金沢市幸町に齊川喜三郎氏（79才）がおられ、氏は12才で石屋に工人として勤められ、以来石積みの仕事を続けて居られる。

(参考文献)

- | | |
|--------|------------|
| 金城勝覧誌 | 金沢市立図書館所内 |
| 金城深秘録 | 金沢市立図書館所内 |
| 金沢城郭史料 | 喜内 敏氏監修 |
| 丸石神 | 丸石神調査グループ編 |
| 石の民俗 | 野本寛一氏著 |
| 石 垣 | 田淵実夫氏著 |
| 江戸時代の旅 | 石川県郷土資料館 |